

論文 / 著書情報  
Article / Book Information

論題(和文)	知財見聞録 パレンバン、戦争の爪痕が残る街、複雑な想い
Title(English)	
著者(和文)	田中義敏
Authors(English)	Yoshitoshi Tanaka
出典(和文)	発明, Vol. 113, No. 11, pp. 28-29
Citation(English)	INVENTION, Vol. 113, No. 11, pp. 28-29
発行日 / Pub. date	2016, 11



# 知財見聞録

## パレンバン、戦争の爪痕が残る街、複雑な想い

東京工業大学 工学院 経営工学系・経営工学コース 教授 田中 義敏

### 巡回セミナーの舞台となった パレンバン

2014年8月21～22日、インドネシア共和国のパレンバンで開催されたインドネシア知財総局（DGIP）と法務人権省パレンバン支局の主催する知的財産セミナーで講演をしてきた。

「DGIPR-JICA Roving Seminar」というセミナーで、日本のJICAも主催者側の重要なパートナーとなっており、“Enhancement of Understanding on Management and Utilization of IPR for Industry, SMEs Sector and Universities”（産官学における知的財産の管理活用の強化）を目的としたものであった。

筆者の講演タイトルは、“Patent Public Domain, Reform of The Existing Inventing”（特許パブリックドメイン、既存発明の活用）、“Know-How of Technology Transfer”（技術移転のノウハウ）であり、ある意味では、インドネシア特有のテーマであったかもしれない。これらのテーマは、インドネシア知財総局側からの要請に基づくものであった。

### 何かひと味違うパレンバン

人口2億5000万人、東西に5000kmを超える国土を有するインドネシア共和国の西側に位置するスマトラ島。同島内の南スマトラ州の州都パレンバンには、太平洋戦争時の石油供給基地と

して悲惨な歴史が刻まれている。なんとも表現し難いが、この街ではインドネシアの他の都市とは異なる人々の感情を感じる。

### パレンバン占領と日本の軍政

インドネシア共和国の歴史を振り返ると、1602年のオランダ東インド会社設立以降のオランダ植民地時代の影響が多く残る。その長い植民地時代に続き太平洋戦争に突入する。1941年12月8日、日本軍は、真珠湾攻撃を開始するのとほぼ同時期にマレー半島からインドネシアへの占領を開始する。

パレンバンでは、オランダ統治時代、石油資源が発見され油田開発が行われた。その産油量の豊富さ故、日本軍の最重要攻略目標となった。開戦後の1942年2月14日、「空の神兵」とうたわれた大日本帝国陸軍の空挺部隊であ

る第1挺進団挺進第2連隊は、オランダ軍が守備するパレンバン油田・製油所と飛行場に対し奇襲落下傘降下、これらをほぼ無傷で占領した。その後、パレンバン油田は連合軍による通商破壊で日本本土への石油輸送が困難になるまでの間、貴重な主要産油地として日本軍に対し石油を供給し続けた。

すなわち、日本軍政下の時代は、日本のための石油供給拠点として貢献した都市である。日本軍の戦況悪化とともに軍政が弱まり、インドネシアの独立準備委員会を発足させる動きが出てきたものの、1945年8月15日に日本が降伏し、軍政当局の主導による独立準備も中止された。

結果的に見ると、日本はインドネシアから資源を確保しただけで、同国の独立には寄与できず、両国関係は、なんとも情けない結果に終わってしまう。



講演する筆者



会場風景



セミナー関係者との記念撮影



ムン川沿いのレストランにて

## 日本人の足跡は見えない

パレンバンに現在居住する日本人は極めて少ないといわれる。確かに、日本の占領下にあった地域とは感じさせない何かがある。一体、当地の皆さんは日本のことをどのように捉えているのだろうか？ 想像すらできない。

法務人権省パレンバン支局の幹部の一人に、祖母が日本人という方がいらっちゃった。当の本人の体格、顔立ちには日本人の面影を全く感じさせないものがあり、大柄で精悍な顔立ちをしていた。私にこっそりと祖母のことを話してくれた彼の心の想いはいかなるものであったか……これも私には想像もできない。

## 戦後賠償のアンペラ橋

法務人権省のパレンバン支局長とBina Darma大学の学長が夕食に招待

してくれた。パレンバン市を東西に流れるムシ川沿いのすてきなレストランだった。空港に通じる国道1号線と交差するムシ川には、「ジュンバタン・アンペラ」(アンペラ橋)という大きな昇降橋が架かっている。支局の皆さんが、日本がインドネシアに対する戦後賠償として建設した橋であると説明してくれた。

そのようなことを笑顔で説明されると何か複雑な心境である。戦後賠償というからには大変な損害をもたらしているはずで、また、戦後賠償したことをどのように受け止めるべきか、実に悩ましい限りである。

夜のアンペラ橋に続く道路沿いの広場には多くの露店が並び、遅い時間にもかかわらず家族連れも多く、年少の子どもたちがはしゃぎ遊んでいた。アンペラ橋はライトアップされ、素朴で

すてきな夜景を演じてくれていた。ただし、以前は橋の中央部が昇降していたそうだが、現在は固定されており、昇降はしていないという。

## パレンバンのPEMPEKの味

セミナーに参加したBina Darma大学の先生が、筆者の帰国前にどうしても味わわせたいと言って、当地の名物であるPEMPEK(日本語では、「ンペンペ」と発音するそうだ)のお店に案内してくれた。実はパレンバンは、「ンペンペの街」としてインドネシアでは有名なのだ。

このンペンペは、魚のすり身とキャッサバ(タピオカ)の粉を合わせて作られたもので、もちもちの食感と、日本人にはなじみのある魚の味付けで、かまぼこのような感じがする。

レバラン(断食明けのお祭り)では、どこの家庭でもおもてなし料理として、ンペンペが食卓に上がるそう。家庭によっても、店によっても、異なる独特の味があり、それが特徴となっているとのこと。

当地の先生は、「パレンバンに来たらこれを食べないで帰すことはできない！ なんとかしてこれを食べさせたい！」と、大変自慢してごちそうしてくれた。確かにおいしかった！ 複雑な街パレンバン、ンペンペも複雑なおいしさでした。ありがとう！



PEMPEKをごちそうしてくれた先生



美しいアンペラ橋の夜景

多様な形のPEMPEK